

文化女子大学
外部評価委員会報告書
—現代文化学部 外部評価—

平成22年3月5日

文化女子大学外部評価委員会

目 次

1. 報告書骨子
2. 現代文化学部ならびに各学科のアドミッションポリシーに関する提言
 - 1) 国際ファッション文化学科
 - 2) 国際文化学科
 - 3) 応用健康心理学科
3. 国際化に関する提言
 - 1) 留学生の受け入れ体制・海外留学制度の拡充
 - 2) 卒業した留学生のネットワーク構築
4. 産業界との連携に関する提言
5. カリキュラムに関する提言
 - 1) 語学教育
 - 2) 教養教育
 - 3) 専門教育
6. その他
7. 外部評価をうけてー林 泉 現代文化学部長ー

資料

- 1) 会議開催日程
- 2) 配布資料一覧

1. 報告書骨子

当外部評価委員会（以下、当委員会）は、文化女子大学外部評価委員会規程に基づき平成21年12月に設置され、同規程第1条に定める趣旨に従って現代文化学部の外部評価を実施した。同大学長から委嘱された委員は下記のとおりである。

当委員会は2008年度自己点検評価報告書等の基本資料を参考に、さらに関係教職員との具体的意見交換ならびに施設見学をとおして、現代文化学部のアドミッションポリシー（教育理念）と同大学における戦略的位置づけを確認し、同学部の現状と中期目標設定をめぐる問題点の抽出に努めた。

当委員会は現代文化学部の特色ある教育研究の取り組みを高く評価し、教育界と産業界における同学部の存在が今後一層重要性を増すことを確信するものである。その期待と実現に向けて本報告書は、①アドミッションポリシーを具現化した中期目標の設定、②同学部3学科（国際文化学部・国際ファッション文化学科・応用健康心理学科）の一層の連携と協調、③国際化を視野に入れた留学（受け入れ・送り出し）制度の整備、④特にアジア地域への展開戦略の一環としての卒業留学生のネットワーク構築、⑤産業界とのより一層の連携、の必要性がより強く認識されるべきであることを指摘した。さらに、報告書では3学科それぞれのカリキュラムの独自性と共通性（特に英語教育と教養教育）についても一定の提言を試みた。

現代文化学部が文化女子大学全体の中で先端的、パイオニア的展開の役割を担っているとするなら、3学科はまさにそれを実現する充分なリソースを有しており、連携と協調によって我が国にこれまでにない新しい分野を切り拓くことが可能である。当委員会としては同学部に今後とも資金面と人材面で有効な支援が行われ、文化女子大学から「可能性を信ずる若い人材」が広く社会に巣立っていくことを期待したい。

なお、本報告書に記載したそれぞれの提言は関係教職員も出席した当委員会での真摯な議論を背景としたものであり、議論内容を過度に要約することなく可能な限り発言のニュアンスが伝わる表現とした。抽象的な提言より具体的な提言が当学部の発展に資すると考えたからである。

最後に、当委員会の作業を遅滞なく進めることができたのは、濱田勝宏副学長をはじめとする文化女子大学の関係者の方々の全面的なご協力に負うところが大きい。付して感謝の意を表したい。

- 委員長 西本武彦 (早稲田大学文学学術院教授)
- 委員 梶原莞爾 (京都工芸繊維大学繊維科学センター特任教授)
- 委員 川浦康至 (東京経済大学コミュニケーション学部教授)
- 委員 渡邊喜雄 (株式会社カインドウェア代表取締役社長)
- 委員 渡辺博史 (株式会社織研新聞社事業局次長)

2. 現代文化学部ならびに各学科のアドミッションポリシーに関する提言

学則に学科単位で人材養成目的が記載されているが、抽象的な表現になっているきらいがある。また、大学全体の中期的な目標設定が明確に示されていないので、中期計画を作成する必要がある。現代文化学部は文化女子大学の中で新しいものに取り組むパイオニア的存在と位置づけてはどうか。

文化女子大学は、ファッション教育に知名度が高いが、国際文化学科・応用健康心理学科に関しては後発的分野となっている。ファッション教育との融合をもっと積極的にとらえて学生募集につなげる工夫を検討すべきである。

1) 国際ファッション文化学科

○現代文化学部国際ファッション文化学科と服装学部服装造形学科との入学者受け入れについては、学内ではすみ分けができていたように見えるが、学外者へ分かりやすく広報していく必要がある。

2) 国際文化学科

○「国際文化コース」の特徴が不明確で、学生にとって卒業後の進路設定が難しいため、志願者が増えない要因となっていると思われるので、コースの特徴等を受験生にも分かりやすく説明する必要がある。

○「国際文化コース」の名称があいまいなためイメージがつかめない。例えば「文化交流コース」のようなコースを設け、日本文化を外国語で伝えるカリキュラムなどが考えられるのではないかな。

○平成21年度・22年度入学生は、3年次より「国際文化コース」と「国際観光コース」に分かれるようになっているが、実際には1年次よりコース指定科目が設定されており、学生にとっては混乱を招く要因となるので改善が必要と思われる。

○中国に進出して成功している日本企業では、日本留学経験者を異文化の相互理解のために雇用している。そのような人材を育成することを一つの目的として留学生の受け入れができるのではないかな。

○海外では日本文化を学びたい人々が多いので、留学生に特化したコース設定も考えられるのではないかな。

3) 応用健康心理学科

○文化女子大学の教育・研究資源と心理学を融合させることにより、他大学にはまねのできない人材の育成ができるのではないかな。

○教育内容をもっと具体的なものにしてはどうか。例えば、食生活に関するテーマ、心理学とファッションに関するテーマなどを検討してみてもどうか。

○障害者介護やカウンセリングなどに従事する人材の育成に力を入れてはどうか。例えばスポーツ心理学を学んだ学生が、プロスポーツ選手のカウンセリングを行なっているなどの実績を宣伝できれば学生募集には良い効果が出る。

3. 国際化に対する提言

1) 留学生受け入れ体制・海外留学制度の拡充

○留学生の受け入れを4割程度にする位の思い切った発想が必要である。繊維産業においては日本では衰退し、アジアへ流失している。この分野において留学生数を増

加させることは大きな意義があると考え。アジア中心に留学生を受け入れていることは良いことだし、当然である。特に中国については、沿岸部から内陸部へファッション産業が進行している。この分野では、今後はもっと多くの留学生が見込めると思う。

- 学費が日本より高いアメリカへ中国・韓国の学生が多く留学している。これらの留学生を確保するための戦略を考える必要がある。また、海外事務所を設置しているので、その活用策を考えるべきである。
- バンクラデッシュなどでは、縫製業としての歴史はあるが、ファッションビジネスとしてのノウハウが無く、高等教育に関する情報を海外に求めている。過去日本でもFITなどに留学し、デザイナーだけではなくファッションビジネスの第一人者として活躍されている方は大勢いる。アジアの中において日本の専門教育がそのような立場を求められているならば、入り口を広げるチャンスではないか。
- フランスの若い人たちは、日本文化、特にアニメ、コスプレやカジュアルなファッション等に興味を持っているようだ。アジアとは異なる切り口で考えていくことも必要ではないか。
- 留学生を受け入れるには奨学金は重要ではあるが、富裕層でありアジアをリードするような人材を取り込むには、カリキュラムそのものが日本にしかない、あるいは文化女子大学にしかないような魅力あるものを打ち出し、海外に発信していくことが重要である。
- 韓国などでは、第二外国語として日本語を選択した学生が日本語力を備え高校卒業後、直接日本の大学に入学してきている。現地の高校に推薦権を与えるなどの入試制度の改革も検討するべきではないか。
- 留学生を受け入れるにあたり、日本と海外とで学期の区切りが異なることが問題となり、スムーズな受け入れが出来ないのが現状である。大学院からでもセメスター制（9月入学）を検討すべきである。
- 留学生の受け入れ数を増加するにあたり、常に議論されるのが日本語教育の充実と、日本語で授業を行うか、英語で授業を行うかという問題がある。留学生の中にはすでにしっかりと日本語教育ができている学生もいるので、柔軟に対処すればよいのではないか。むしろ留学生に選択をさせる方法もあると思う。
- 諸外国と比較すると海外へ留学する日本人学生が、先進国の中でもっとも少ないようである。この方面でも思い切った方策が必要な時期に来ていると考える。
- FIT・NTUへ留学する特別プログラムや文化女子大学留学規程などを拡充し、日本人学生の海外留学を支援していくべきではないか。
- グローバルコースのような半年ごとに海外の学校を回るようなシステムはできないか。例えば、修士課程で1年目を日本で、そのあとアメリカで半年、フランスで半年などと言ったコースの設置の可能性を検討してはどうか。
- 海外の大学、特にファッション系大学では、ほとんどが英語で授業を実施している。留学生を増やすためには、語学だけの問題ではなく、就職先の問題もあげられる。日本にきている留学生で、日本に就職しキャリアを伸ばしていく留学生は少なく、母国へ帰国せざるをえない状況である。

- アメリカなどでは、卒業後国内に就職し、キャリアを積むことができ、その後帰国するなり、永住するなりの方法を選択することができる。奨学金制度も充実している。日本の場合は、企業関連の奨学金がほとんどない状況である。
 - 海外では、卒業研究などでも企業をスポンサーとしたり、企業と共同して行なう研究が少なくない。文化女子大学では、企業とタイアップした研究ができるのではないかと。そのようなことが実現できれば、留学生には大きな魅力になるのではないかと。
- 2) 卒業した留学生のネットワークの構築
- 留学生の受け入れ実績を踏まえ、各国別に卒業生を把握し、海外同窓会組織を作る必要があるのではないかと。海外の多くの大学では、卒業後の活動を広報したり、ホームカミングデーとして卒業生を招いたり、寄付金を募る組織を設立するなどの活動をしている。
 - 文化女子大学で学んで母国に帰りビジネスを展開する卒業生が多くなれば出口戦略にもなるのではないかと。また、点から線そして面へと広げられる意味からも、留学生の受け皿を広く持つても良いのではないかと考える。
 - アメリカに留学している学生は、専門教育を通して人的なネットワーク作りを学び、それを活用しているケースが多い。文化女子大学でも多数の留学生を輩出しているのでネットワーク作りには力を入れてはどうか。その一方策として、卒業生に対してメールアドレスを付与してはどうか。
 - 留学生の受け入れの拡充のためには、海外事務所の活用も重要ではあるが、現在在籍している留学生からの口コミも重要ではないかと。

4. 産業界との連携に関する提言

- 国際ファッション文化学科ファッションジャーナリストコースに関してみると、日本のメディア企業には、専門学科を卒業したからといって即戦力として採用しているところはあまりない。欧米の場合などは、専門分野を出て自分の視点・観点をジャーナリストとして活躍している人々はいるが、日本の場合はごくわずかである。産業界と教育界との関連に問題があるのではないかと考える。一定の専門教育を受けた人材が、その専門を活かせる分野に就職できるような仕組みを作らねばならないと考える。
- 産業界としては、論理的に説得できる人材がほしい。リーダー教育を受けた人材でネットワーク作りのできる人材が強く求められる。
- 今までの大学教育では、標準化された人材育成をしてきているが、企業は標準化された人材は求めていない。分野に特化した人材が求められる時代になっている。
- 異文化理解とファッション、心理学とファッションのようにそれぞれの専門分野を横断的に結び付けた教育を積極的に実施すべきである。
- 繊維業界では、ファッションが人間の心理面に与える影響や健康面に与える影響などについての研究が行なわれ始めている。専門分野を融合した研究分野が、社会や産業界から求められているのではないかと。
- JR 東日本では、国の方針を踏まえ多角的な「観光政策」を検討している。そのような情報を参考としつつ、地方自治体とタイアップした町おこしの中で、例えば、

ホテル・旅館の浴衣をデザインするなど社会的貢献ができればよいのではないか。
具体的に文化女子大学が貢献できる分野は、まだあるのではないか。

- インターネットの分野は、新しい分野として将来性がある。そのような新しい分野にインターンシップ先を見出していくのも一方法であると考える。
- 文化女子大学の資産を活かし、産学共同研究等に力を入れることにより、より良い学年確保に結びつけることが出来るのではないか。

5. カリキュラムに関する提言

1) 語学教育

- 英語教育に力を入れているが、学部学科間でカリキュラム内容が統一されていない。独自性があるとも取れるが、改善の余地はあるのではないか。
- 語学教育としての英語教育と専門分野での英語使用は必ずしも同じレベルで扱えないので、分けて考えてはいかかがか。
- 国際社会や世界経済の動向を踏まえると中国語の教育の強化も必要ではないか。
- 留学生を活用し、日本人学生との交流の中での語学教育を検討してはどうか。
- 語学学習センター等の設置を検討してみることも一案である。
- 留学生に対する日本語教育には苦慮している大学は多い。また、英語での授業の実施が盛んに言われているが、そのような教員採用も難しいのも実情である。留学生のみならず、日本人学生にとっても有効な英語による授業のあり方を検討する必要がある。

2) 教養教育

- これからは、組織の時代から「個」の時代であり、「個」がひかり、その集団がいかに光るかではないか。本学の特徴である実践的な教育を通して体力も精神力もたくましい人材を育ててほしい。
- 総合教育科目とコラボレーション科目の改善を検討し、より充実した教養科目の設置が望まれる。
- 多岐にわたる専門分野があるので、キャンパス間を超えた教養科目を検討してはどうか。
- 教育方法としてアニメ等を取り入れてはどうか。バービー人形のファッションを取り入れヒットしているメーカーもある。

3) 専門教育

- 多様化する国際社会で即戦力として活躍できる人材を育成することを目指し、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を体験的に学ぶことを基軸とするカリキュラム編成が望まれる。
- 実践的な教育を実施しているが、インターンシップの取り組みも教育プログラムの一環として一層拡充させるべきである。また、2年次・3年次にもキャリアデザイン科目の設置を検討し、学生の意識を向上させることが望まれる。
- 観光庁設立など社会的情勢を考えれば観光分野における人材の需要はあると考えられる。3学科の特性を融合させ実務教育として活かすべきである。

6. その他

- 高校生に対しての進学指導、キャンパス見学等については、文化女子大学が養成しようとしている人材像や教育内容を分かりやすく説明できるように、取り組んでいただきたい。また、地域貢献としてのコミュニティーオープンカレッジについてより一層の充実策も検討されたい。

7. 外部評価を受けて—林 泉 現代文化学部長—

外部評価委員会の委員各位には、ご多忙中のところ委員をお引き受けいただき、大学、企業、メディアなどの広い分野から貴重なご提言やご意見を頂くことが出来た事に感謝申し上げます。我々内部の者にとっては、気がつかない点や見落としがちな点について、幅広い角度からご指摘・ご助言いただき、改めて外部評価の重要性を認識した次第であります。

委員会では、アドミッションポリシー・留学生の受入れ体制・卒業した留学生のネットワーク構築・産業界との連携・語学教育等のカリキュラムの改善等の多岐にわたり熱心なご討議を頂きました。

上記の貴重なご提言やご意見を本学部の教職員一同真摯に受け止め、改善すべき点は積極的に改善し、質の高い大学へのステップアップに繋がりたいと考えております。

お忙しい中、ご尽力頂いた外部評価委員の方々に改めて深く感謝申し上げます。

資料

1) 会議開催日程

第一回

平成21年12月1日(火) 午後3時～午後5時

小平キャンパスK館1階会議室

出席(敬称略・順不同)

西本・梶原・川浦・渡邊・渡辺

濱田・林・野口・齊藤・山本・福田・北城・山口

第二回

平成22年1月21日(木) 午後1時～午後3時30分

新都心キャンパスB館4階会議室

出席(敬称略・順不同)

西本・梶原・川浦・渡邊・渡辺

濱田・林・野口・齊藤・山本・福田・北城・山口

第三回

平成22年3月5日(金) 午後1時～午後3時

新都心キャンパスA館4階会議室

出席(敬称略・順不同)

西本・梶原・川浦・渡邊・渡辺

濱田・林・野口・齊藤・山本・福田・北城・山口

2) 配布資料一覧

- ①文化女子大学外部評価委員会資料(外部評価委員会規程・基礎データ等)
- ②文化女子大学自己点検・評価報告書 一平成20年度一
- ③履修要項(平成21年度)
- ④授業計画(シラバス)(平成21年度)
- ⑤コラボレーション科目シラバス(平成21年度)
- ⑥外国語科目学部学科別開講状況一覧(平成21年度)
- ⑦文化女子大学入学案内(2010年度版)
- ⑧入試情報2010
- ⑨AO入試ガイド2010
- ⑩文化女子大学しおり(学生生活のお知らせ)
- ⑪紫友会会報(同窓会誌)
- ⑫文化学園案内(総務部発行)
- ⑬学園グラフ(平成21年3月～9月版)